

ブロンテ姉妹 — 歴史との関わり

松 原 典 子

1. はじめに
2. ブロンテ姉妹の人生
3. 作品との関係
 - (1) ジェーン・エア
 - (2) 嵐が丘
 - (3) アグネス・グレイ
4. さいごに

1. はじめに

ブロンテ姉妹 (The Brontës) の生きた時代はどのような時代だったか。文学史上、ヴィクトリア朝という範疇に入る。ヴィクトリア朝とは、1837年から1901年までのヴィクトリア女王 (Queen Victoria) の治世を指し、世界に先駆けて産業革命を経験したイギリスが国力を著しく伸ばし、最盛期を迎えた時代である。ダーウィン (Charles Darwin) の進化論から生まれた科学技術の発展、文芸や憲政の面でも多くの革新がなされ、近代社会の幕開けとなった時代である。

そしてこれまでの時代以上に民衆に恩恵を与えたものに鉄道の普及が挙げられる。鉄道はジョージ4世 (George IV) の時代、1825年にストックトンからダーリントン間に世界で初めて開通した。その後1830年、ブロンテ姉妹も乗ったと思われるリバプールからマンチェスター間が開通し、鉄道網は急速に拡大していった。1836年にはロンドンも鉄道の恩恵を受けることになった。

また社会問題に関しての法律改正も実施され、1832年の第一次選挙法改正、1834年の新救貧法、1847年の女子の10時間労働を制限する改正工場法も施行された。同時に女性解放の機運も高まり、1841年には家庭教師互助協会が設立された。そしてこの時代に一番活躍した女性、1854年クリミア戦線に赴いたナイチンゲール (Florence Nightingale) である。

さらに対外的には、1842年に香港を獲得、1851年にはロンドン大博覧会開催が成功し、近代国家としての磐石な様相を呈した。

本論ではブロンテ姉妹と作品がヴィクトリア朝とどのような関わりを持っていたかを検証していくこととする。

2. ブロンテ姉妹の人生との関わり

ブロンテ姉妹が短い人生の大半を過ごしたハワースの牧師館はブロンテ博物館としてブロンテ愛好家にとっては聖地である。ハワースはイギリスの片田舎にある。そもそもヨークシャー自体がイングランドの北部で、オホーク海の真ん中あたりという北緯53度の高緯度に位置し、自然状況は厳しい。サハリン(樺太)の最北端といえわかりやすい。またペナイン山脈の中央部に位置しロンドンからの直通の鉄道路線からも外れている。姉妹の生きた時代は今から250年以上前であり、鉄道が敷かれつつあったとはいえ、ハワースまでは通っておらず、キースリーまで馬車に揺られて行くしかなかった。姉妹とヴィクトリア朝の華やかな時代、発展しつつあった時代との接点は少なかった。

姉妹が全員短命であったことは時代の恩恵を受けなかった証拠といえる。衛生状態の悪い下水処理の不完全な牧師館での生活が虚弱な体質を作ったのである。そのような片田舎では、ロンドンなどの大都会の情報を生活の常識として捉えることは困難であった。当時ハワース村の中で、ブロンテ姉妹は牧師という知識階級の家で育ち、村の子供たちと接触の機会は乏しかった。村の中での文化的な生活は新聞購読をしていたことである。

シャーロットとアンがキースリーから夜行に揺られ一晩かかってロンドンに向かった目的は自分たちの存在を明白にすることであった。出版社や一般読者からどんな作家が書いたのか、男性なのか、女性なのかと作品以外の点で取り上げられていたからだ。作品がヴィクトリア朝のステレオタイプとかけ離れていたからであった。二人のいでたち、風貌はロンドンという大都会の人間にとっては常識的ではなかった。彼女たちの外観すらヴィクトリア朝の恩恵を受けていなかった様相を示していた。

彼女たちはブリュッセルに留学したり、ロンドン社交界に出入りしたりしたが、生活の拠点はハワースの自然の中にあった。エミリー(Emily)が自然児であったと言われるが、シャーロット(Charlotte)もアン(Anne)もまたブランウェル(Branwell)も結果的にはハワースの荒野が自分たちのヴィクトリア朝であった。

姉妹が家庭教師として苦い経験をしたり、ブランウェルが自分の才能に見切りをつけてロンドンから戻ってきたり、駅員として満足に勤務できなかったのは、彼らがヴィクトリア朝というステレオタイプに属さない人生と環境の中で成長したからである。母不在の人生と家庭環境に原点があることに一理あるが、ブランウェル伯母(Elizabeth Branwell)という完全ではないにしろ母は存在した。8人兄弟の彼らの生活は広大な自然の中に存在する小さな世界にあり、この世界こそが彼らにとって最大のものであり、その後の小説家としての人生は付属物である。

ところが姉妹の行動範囲は自然という最大の世界から最小であったはずの世界へと移行していった。つまりヴィクトリア朝的社会への進出である。まず挙げられるのは、家庭教師、あるいは教師としての自立である。社会と隔絶した世界でわずかな情報しか得られなかった

彼女たちの選んだ道は、結婚こそが人生で最良の生き方であるというヴィクトリア朝女性の常識とは対極のものだった。それがさらに加速され女学校設立という計画を立て実行した強い決意はヴィクトリア朝の常識とは相容れない。彼女たちの家庭環境がそれを推進させたとするのが当然である。つまりハワースの片田舎の牧師の家庭は金銭的にも裕福とはいえない。また自分たちの容貌が家庭の天使にはほど遠いことも十分承知していた。これがヴィクトリア朝の中で、彼女たちにとっての最大の問題点であった。時代に即した平凡な生き方は到底望める状況ではなかった。そして出版に際しても、三人は男性か女性か区別しがたい姓カラー (Currer) をペン・ネームにした。これこそヴィクトリア朝という時代に生きた人間を象徴している。

3. 作品との関係

本論では三姉妹が初めて世に送り出した「ジェーン・エア」(*Jane Eyre*) と「嵐ヶ丘」(*Wuthering Heights*) と「アグネス・グレイ」(*Agnes Grey*) の三つの小説を対象とする。しかし論を展開する前に三姉妹と時代と彼女たちの全小説との関わりについて概略を示す。

シャーロットが描いた世界は実生活が基本にある。ハワース牧師館という狭い社会と、時代を生き抜くための方策として選んだベルギー留学から得た経験。この二つが柱をなしている。処女作でありながら出版拒否にあった「教授」(*The Professor*) の世界もブリュッセルという時代を象徴する大都市を背景にしている。つまり大陸の先進性をもつヨーロッパの十字路である地を留学先に選んだことは、自分たちをイングランドの片田舎の生活から大陸というかけ離れた世界に生きることで時代の先端に近づこうとしたのである。「シャーリー」(*Shirley*) の背景はイングランド中部であるが、重要な登場人物はベルギー人である。また「ヴィレット」(*Villette*) も同様な人物設定がなされ、「教授」(*The Professor*) のヒロイン、ヒーローはともにベルギーで成功を収める。これら登場人物の設定はシャーロットがエジェ先生 (M. Héger) を慕っていたからという短絡的な答えでいいのか、という感がする。結果的に「ベルギー」という点で一致しているが、ベルギーはスペインから独立して間もない新興国家であり、ヴィクトリア女王の伯父、レオポルド I 世 (Leopold I) が初代国王であった。新しい息吹あふれる世界を求めるシャーロットはベルギーに自らを置いた。エミリがヨークシャーの荒野を嵐ヶ丘として場面設定し、アンがイングランドを「アグネス・グレイ」や「ワイルドフェル館の住人」(*The Tenant of Wildfell Hall*) の背景としたのに対して、シャーロットは歴史認識の幅が広く、大陸にヴィクトリア朝で生き抜く糧を見つけようとしたのである。留学という経験、長女という立場、結婚できそうもない自分、というシャーロットの人生は三姉妹の中で一番時代と関わりある位置にあった。「ジェーン・エア」に描かれた寄宿学校や家庭教師という社会的部分、「シャーリー」に描かれた産業革命や墮落した牧師の姿、「ヴィレット」や「教授」で新しいヨーロッパの十字路に生き続ける古い大陸人、そして彼らの産業革命で世界に羽ばたこうとしている新興国家イギリスに対する偏見を知り、カトリックとプロテスタントというキリスト教の中での差異などを冷静な目で見ている。

エミリは30年の生涯の中でハワース村から出た期間は3人の中でも極端に少ない。幼い頃

の寄宿学校とブリュッセルへの留学だけであり、シャーロットとアンがロンドンに出かけたときも同伴しなかった。姉妹でありながら、孤高の人生を送ったといえる。家族の中で最も外部との接触を避けていた。自然と一体化した自分だけの世界を求めた。エミリが自然を求め、自然に中で安らぎを得、自然と隔離される生活を拒否したという事実は「嵐が丘」の登場人物と自然との一体化に現れている。「嵐が丘」の中で荒野はキャサリン (Catherine Earnshaw)、ヒースクリフ (Heathcliff) と共にあり、荒野は二人の生涯を見届け、他の人物の介入を拒否している。これはそのままエミリに合致する。そこでエミリは時代、歴史といった事実を作品の中に組み込まなかったのかという疑問が出てくる。しかし作品の背景に時代は確かに隠されている。それは結末が1801年から1802年にかけてであることである。この年は三姉妹の大好きな英雄ネルソン提督 (Holace Nelson)¹ 最盛期の時期である。そしてヒースクリフの生まれた年は1764年。ジェームズ・ハーグレイブス (James Hargreaves) が紡績機を発明し、産業革命の要因となった年である。ヒースクリフは産業革命の落とし子であり、アーンショウ氏 (Mr. Arnshaw) がリバプールで拾ってきた² 背景に産業革命があることを暗示している。階級社会を打破しようとするヒースクリフの生き方にも資本主義が垣間見られる。歴史的時代の発端時に主人公を誕生させ、象徴的時代に作品を終結させたことは、登場人物たちが時間的経過とともにその時代を生きた証拠であり、エミリ自身も時代の特異性の中で生き、作品を描いたのである。

「嵐が丘」は声高に社会に対しメッセージを発してはいないが、作品の織り成す愛憎物語の根底に時代の問題点である社会性が存在するのも事実である。慣習法のイギリスでヒースクリフの生き方は、つまり主家の財産奪取が可能であったかどうかという点は時代を背景にしている。自然に翻弄される狭い嵐が丘というヨークシャーの田舎社会しか見ていなかったと考えられるエミリではあるが、その視野は小さな穴から大きな世界へと広がっていた。

「アグネス・グレイ」の中で描かれている世界も「嵐が丘」と同様広くない。しかし「嵐が丘」の閉塞感は「アグネス・グレイ」には感じられない。背景となった世界がアンの経験した広い世界であるからだ。アンの経験した世界はシャーロットよりも広い。外国に行ったことはないが、人間関係の多さ深さという点では三姉妹の中でも一番経験豊富だ。アグネス同様アンは家族の中で一番年少者であり、一番責任感も悲壮感もない立場でいたにもかかわらず、一番最初に家庭教師を経験し、一番長い期間³ 従事した。他人の家庭の中で家庭教師という身分にありがちな主家からもその家に使える自分よりも下の者たちからも人間性を認知されないという境遇を経験したことで時代を一番知っていた。しかもアンはアグネス同様自分の立場を相手に悟られないようにする傾向があった。

男女間の恋愛感情に関して、ウェストン (Edward Weston) に対するアグネスの思慕にアンの経験が反映されているといわれる。そして家庭の天使像を求めて女性から男性にアプローチする機会が増えていたにもかかわらずアンもアグネスもともに、それを善しとせず一時代前の女性のように大人しく待つことに耐えている。この姿は時代の産物というより個人の生き方、性格によるものと判断したい。「ワイルドフェル」の中でグレアム夫人 (Mrs. Graham) として登場するヘレン (Helen Lawrence Huntingdon) は家庭の天使像に憧れ結婚したが破綻に陥った。アンが時代に対して一つの挑戦をしたといえる。アグネスが清く

正しい生き方をしていれば、素晴らしい男性が現れ、幸福な結婚ができる、という「アグネス・ 그레이」の中でアンが描いた世界とは対極のものである。ヘレンの生き方は自己満足への挑戦だった。ヘレンに自己満足と自己欺瞞を与えたのはアンが経験した家庭教師先での人間模様によるものである。狭い世界に生きていたエミリと自分の立場に縛られていたシャーロットには考える余地のなかった世界である。この点でもアンの方が時代を捉える眼力があった。彼女の歴史認識がヘレンという人物を登場させた。中・上流階級の女性の結婚とその先にある長い人生。そこに隠されている家庭という最小単位の社会の中で時代に翻弄されたヘレンである。夫アーサー（Arthur Huntingdon）は典型的なヴィクトリア朝以前から継続するイギリスの男、夫である。女性は物であるという認識が生き方、考え方の違いを表している。アーサーが異常であったとは考えにくい。ヴィクトリア朝初期の上流社会の紳士たちはジョージIII世、IV世の時代に見られる放蕩と贅沢な社会道徳の規範から墜落した人物が多く、アーサーはその典型的人物である。アーサーとヘレンが結婚したのは1821年。イギリス王室ではその前年1820年に奔放でスキャンダラスな摂政時代が終わり、国王に即位したジョージIV世はキャロライン（Caroline Brunswick）と離婚している。ヘレンの結婚は王家と同じ運命を辿る。アーサーを見限ってギルバート（Gilbert Markham）との愛に生きることを決心するのは、ヴィクトリア女王の理想的夫婦像に関係がある。女王はアンより1歳年上で1819年生まれ。女王に即位するのが1837年。ドイツ人アルバート（Albert of Saxe-Coburg-Gotha）との結婚は21歳のとき、1840年である。「ワイルドフェル館の住人」が出版されたのが1848年。女王は8年の結婚生活ですでに6人の子供を儲けていた。この点で女王夫妻はそれまでの上流社会、貴族社会の夫婦関係とは正反対な厳格な一夫一婦制をとった。作品完成までの間にヴィクトリア女王の結婚生活がアン達の望んだ夫婦と一致していた。それ以前の時代の負の産物が女王によってアンに与えられた賜物であり、アン達の三姉妹の中で一番深かった信仰心宗教心と加味された作品であり、道徳観に関してアン達の作品はヴィクトリア朝以前からの悪弊を消去する良心あふれる点で時代の中に存在する。シャーロットの作品の中には、夫は主人公として登場していない。彼女の夫たちは夫となった時点で物語りは終わる。彼らが結婚生活を営む段階でどのような自分を発揮し、または露呈したかを描写して欲しかった。

アンはブロンテ三姉妹の中で最も軽く扱われてきた。シャーロットのような社会に物申す作家でもなく、エミリのような異様な世界を描く作家でもない。しかしアンは描く世界は平凡であっても一番時代の女性の生き方を描いている。結婚への道のり。結婚そのもの。破綻した結婚。そしてその間に自己という意味を持った女性。アグネスもヘレンも最終的には同じ階級のウェストン、あるいは自分より格下のグレアムと子連れ再婚する。これこそアン達の描く時代への挑戦であった。最後の場面でのグレアムの驚き、それは時代を象徴する階級社会と家庭の天使であるはずの女性、それと対極に位置する女性がヘレンに備わっていたことである。新しく自己主張する女性。これがヘレンであり、アン達の潜在意識、そしてブロンテ家の中で一番年少の誰からも好かれ大事にされてきたアン達の精一杯の自己表現であった。

そこで三姉妹が初めて小説を発表した三つの作品についてさらに述べていくことにする。

(1) ジェーン・エア

ジェーンは1789年に誕生し、直後孤児となった (both died within a month of each other. I, III, 26)。⁴ 1789年はフランス革命勃発の年であり、新しい時代が開幕し、強烈な印象を与えた年であった。ジェーンというヒロイン誕生の年を1789年にしたのはシャーロットの意図によるものか。ジェーンは優しい伯父に引き取られたが、その伯父も死に未亡人と2人のいとこの生活は愛情の欠片もない悲惨なものだった。そのリード家 (the Leed) から寄宿学校ローウッド (Lowood School) に向かったのが1800年 (I, V)。この年はイギリス人、特にブロンテ家にとっては大きな出来事であった。アイルランド併合法がこの年8月に成立したのである。ジェーンが自立を目指し懸命に努力し (I rose to be the first girl of the first class; then I was invested with the office of teacher. (I, X, 84)、家庭教師の広告を出すまでに成長した⁵ のが1807年 (I, X)。ジェーンは18歳になっていた。そしてソーンフィールド (Thornfield) に到着したのが1807年10月 (I, XI)。1807年は奴隷貿易廃止法が成立しイギリス国内の経済にひと区切りがついた年であり、ジェーンの人生にとっても同じような区切りの年であった。その後、ジェーンの女性としての人生の一步となるロチェスター氏 (Edward Rochester) に偶然出会うのが1808年1月 (I, XII)。ジェーンのロチェスター氏の第一印象は中年の紳士といったもので (had not reached middle age: perhaps he might be thirty five. I, XII, 114) 恋愛対象となるような出会いではなかった。⁶ 家庭教師としてのジェーンはアデル (Adèle Varens) にとっては完全な師であった。それまでのジェーンの努力と生まれながらの人間としての資質や教養、さらには苦しみ、悲しみという人間の負の部分の体験が、完全無欠な家庭教師へ成長させていた。ロチェスター氏がジェーンを伴侶として選ぶことになったのは家庭教師としての毎日の生活を、雇い主として見てきた結果であった。多くの女性と関係を持った放蕩の末、人間としての美しさ、誠実さ、謙虚さがロチェスター氏にとって伴侶を選ぶポイントとなった。家庭教師になってわずか半年。それまで愛の無い人生を過ごしてきたジェーンにとっては最高の日となった。しかし当日またもや人間不信に陥る最大の試練に出会うこととなる。重婚という非常識な場面に自ら遭遇したのであった。

シャーロットが青春時代を送った1830年代は女性は結婚するとすべての財産の管理は夫に委ねられた。ロチェスターは野獣と化した妻 (結婚時は多額の持参金があった) との結婚が父親の財産目当てのものだと知り、妻の行為が遺伝によるものと判断した後自分の意思による結婚ではなかったことから愛のない誤った結婚だと考えたが、時代の風潮とは異なり離婚することはなかった。しかし屋根裏の獣用の檻のような部屋に閉じ込めたままジェーンと重婚しようとしたのである。ジェーンの道徳心が勝り、重婚の危機は回避されたが、ロチェスターの妻との離婚に踏み切らなかったのはヴィクトリア朝の夫としてはわずかながらも良心の欠片があったのである。

ジェーンは屋敷を飛び出し、荒野を彷徨い死と隣り合わせの日々を送るが、偶然助けられた家は、天涯孤独と考えていた彼女にとっては意外なことにいとこの牧師館であった。さらにジャマイカにジェーンに遺産を残していた伯父の存在を知り、女性として経済的自立を果たす。これが1808年11月。そしていとこのセント・ジョン (St. John) からのプロポーズ。

ところがジェーンは愛の無い結婚を拒否。愛が結婚にとって必要条件と考えていたからだ。ヴィクトリア朝の結婚観では必ずしも結婚に愛が必要とはいえない。むしろ愛を結婚の条件にするのは時代に逆行することもある。ちっぽけな体形、劣る容貌の平凡な人間であるジェーンに与えた結婚観はシャーロットのヴィクトリア朝への抵抗であった。

結婚に関して興味深い事実がある。ジェーンとロチェスターとの結婚式は7月。ところが式当日祭壇の前で重婚発覚 (The marriage cannot go on. II, XI, 293)。セント・ジョンからのプロポーズは5月で、その告白は愛からのものではなかった (you are formed for labour, not for love. III, VIII, 323)。しかし1810年6月 (III, XII) に経済的自立を得、階級という壁を越え、ジェーンはジュン・ブライドになった。不具者となったロチェスター氏は純粋な愛から再プロポーズ (I will at least choose—her I love best. Jane, will you marry me? III, XI, 451)。シャーロットの結婚への憧れが物語の中で成就したのである。1811年、男児誕生 (III, XII)。1811年には一大事件、ラダイト運動が起こる。つまりジェーンが1810年に結婚し、1811年に出産するという時間の流れは計算された結果ではないか。

1819年、ジェーンは結婚10年経って半生を振り返り語った。ジェーンが前半生の負の部分とその後の人生の正の部分进行した年には、マンチェスターで虐殺が起こり、工場法成立という時代が大きく揺らいだ時であった。時代に大きな波が押し寄せた時だからこそジェーンは自分の幸福がさらに継続することを祈願し、自分を曝け出すことで新たな人生の一步を歩み始めるつもりではなかったか。

(2) 嵐が丘

1801年の年末、語り手ロックウッド (Mr. Lockwood) がスラシュクロス・グランジ (Thrushcross Grange) を借りるため訪れた嵐が丘でヒースクリフに挨拶する所から物語は始まる (I)。そして物語の最終段階は1801年から1802年にかけて (XXX~XXXIII) であり、物語が終わるのは1803年 (XXXIV) である。ロックウッドが嵐が丘の過去をネリー (Mrs. Nelly) と読者に語りかける。異常な愛に生きたヒースクリフの誕生は16歳と語られるので、(He had reached the age if sixteen. VIII, 86) 逆算すると1764年。キャサリン・アーンショウ (Catherine Earnshaw) の誕生は1765年。1764年はホレイス・ウォルポール (Horace Walpole, 4th Earl of Orford) が「オトランド城奇譚」 (*The Castle of Otranto*) を刊行した年である。この小説はゴシック風の建物を背景に超自然的な怪奇物語を描いたゴシック・ロマンの最初の作品であり、文学史上エミリー・ブロンテはこの作品から大きな影響を受けていたといわれている。その年1764年をヒーローの誕生年と設定したのはエミリーが「オトランド」に影響されたことを示している。翌1765年は1764年のイギリス東インド会社軍の勝利後、植民地住民にも本国同様の税をかけ軍の宿舎や食料提供が義務化された年であり、強いイギリスの証拠でもある。ヒースクリフとキャサリンという激しい気性の登場人物の誕生年が歴史的事項においても彼らの性格を把握するのに共通項があるのは一考の余地がある。この二人が対面し兄と妹の関係が始まったのが1771年夏。この年はリチャード・アークライト (Richard Arkwright) がイギリス初の水力紡績機を工場で使用した。つまり新しい時代の象徴と捉えることができ、主人公の二人の恋の成り行きも波乱に富み、それまでのイギ

リス小説の愛の描写の中でも極めて珍しいという事では、分野は異なっても初めてという共通項がある。

ところでキャサリンとリントン家の長男エドガー (Edgar Linton) の結婚が確実になる1780年にヒースクリフは嵐が丘を出奔する。この年、イギリスで初めてダービー競馬が開催され、社交の場が拡大していった。ヒースクリフがアーンショウ氏に拾われたリバプールではなくロンドンへ向かったのは、新しい時代の街に求める何物かがあったからであろう。1783年、そのロンドンから一旗あげ紳士然として戻ってくる (X)。アメリカが7年前にイギリスからの独立を宣言した事実をようやくパリ条約でイギリスが承認したのが1783年。そしてその年末にイギリス史上最年少の小ピット (William Pitt) が24歳で首相兼蔵相に就任した。非人間的な自分の礎を作った敵地に、二十歳にもならない氏素性の知らないヒースクリフが、独りよがりの凱旋をするのは時代の申し子という自負すら現れている。つまり彼は拾われた立場から主家の娘との恋を成就できなかったことを、財を築くことで資本家の一員になり、嵐が丘を支配する野望を持っていた。エドワード・チタムが述べているようにヒースクリフをアイルランド人と考えるなら、彼は嵐が丘というイングランドの支配者に勝利することのために戻ってきたのである。

その第一段階としてキャサリンの夫、エドガーの妹イザベラ (Isabella Linton) の無垢な乙女心を誑かし結婚する。イザベラはヒースクリフを紳士と思い込んでいる。ロンドンという新しい息吹の街で生きてきたヒースクリフにとっては、産業革命の恩恵を受けていない自然イコール嵐が丘に住む人間は赤子をひねるに等しかった。そしてヒースクリフのキャサリンへの異常な愛は内在する復讐心と比例するように増幅していく。異常な愛がキャサリンの元へ戻るために嵐が丘に戻らせた。キャサリンもエドガーの妻でありながらヒースクリフを愛している。妻としての愛と、女として、というより人間として自分と同じ価値観を持つ人間に対する愛と言うべきなのか。愛の形は千差万別である。鬱屈した愛に生きたキャサリンが初めての子供の出産後すぐに死亡 (XVI)。結果、ヒロインはキャサリンから娘キャサリン (Catherine Linton) へと変わり、娘のキャサリンが後半のヒロインとして成長していく。

この第二のヒロイン、キャサリンがヘアトン・アーンショウ (Hareton Earnshaw) と出会うのは1797年。当時ヘアトンは18歳でありながら文盲 (her rude-bred kindred XIX, 215) であった。ヒースクリフの復讐がヘアトンの今を構成していた。キャサリンに対しては画策が効を成し息子リントン (Linton Heathcliff) と結婚させることに成功する。この1801年の結婚によりヒースクリフはアーンショウ家とリントン家の二つの由緒ある家の全てを手に入れることとなった。しかしリントンはわずか4ヶ月で死去し、キャサリンは若い未亡人となる。キャサリンにとっては、リントンの死に慟哭する代わりに自由を得るチャンスが到来する。若すぎたことと、全てがヒースクリフに支配されていたからである。一方、復讐に成功し、そして継承者である息子を亡くしたヒースクリフは永遠の恋人キャサリンの棺桶を開ける (to remove the earth off her coffin lid, and I opened it. XXIX, 306)。⁷ 呪われるべき行為であるが、これこそが異常な愛に生きたヒースクリフの結末である。それが1801年。この年イギリスは連合王国 (Great Britain and Ireland) となり、ブロンテ姉妹の敬愛す

るネルソン提督率いるイギリス艦隊がナポレオン (Napoleon I) の圧力によりイギリスに挑んだデンマーク海軍を打ち破る。年が変わり1802年、キャサリンは文盲のヘアトンに知識を与えることに喜びを感じ、ヘアトンも知識を得る喜びと進歩を感じ取っていた。若い二人は各々人間としての価値を高めることに成功し、愛を感じるようになった。その愛に満ちた姿を見て、ヒースクリフは人生の結末を知り (It is a poor conclusion, is it not? XXXIII, 341)、断食という手段で自らの生を終える。1802年はトマス・ウェッジウッド (Thomas Wedgewood) が世界で初めて写真撮影に成功した年であるが定着方法が分からなかったため、せっかくの写真は消えてしまう、という時代に入っていた。ヒースクリフが彼流の真実の愛に生き、キャサリンの元へ出発し、その二人の姿を村の子供が幽霊として見たのは写真が消えてしまった、という現象に近い。そして翌1803年、キャサリンとヘアトンはヒースクリフの死により完全に自由を勝ち得、結婚した。彼らの結婚は1803年1月1日。前日の1802年12月31日にインドはイギリスとバセイン条約を締結し、保護領となった。二人の結婚と人生の出発はイギリスの新しい歴史の一ページと一緒に始まった。

(3) アグネス・グレイ

「アグネス・グレイ」は「ワイルドフェル館の住人」と比べると日時の描写が明白でない。「アグネス・グレイ」が日記、「ワイルドフェル」が書簡、(しかし大方の部分はヘレンの日記であるが) という表現形式であり、ともに日時の描写が多くなれば物語に詳細さとリアリティが加味される。しかしアンは「アグネス・グレイ」に日時という時間描写をしていない。それでは物語の時間経過はどのように表されているのか。アグネスは最終章の第25章で、この作品が日記を基に書かれたことを告白している (My diary, from which I have compiled these pages. XXV, 547)。⁸ これから分かるように「アグネス・グレイ」はアグネスが自分の少女時代から家庭教師を経験し結婚し、3人の子供の母になるまでの半生を自らの言葉で回想している。家庭教師としての日々の描写が作品の中で大半を占めているが、ヴィクトリア朝の中・上流階級の家庭と教育の実情が詳細に書かれており、アンはアグネスを媒介者として問題を提起することになった。しかしアンに問題提起する意識があったと考えるのは疑問である。彼女の社会経験は家庭教師だけであり、小説執筆に関して完全なフィクションを創作するだけの能力があったかは明白でない。ということでアンは小説は実体験の家庭教師像を描くことしかできなかった。つまりリアリティの富む作品が完成したのである。しかし物語の中で、「何日経った」、「何週間経った」、という表現はあっても、それが一体1800何年のことなのか、あるいは1700年代のことなのか描写されていない。アンが意識的に行ったことなのか、読者に考えさせる時間を与えたのか。ではアンに読者を意識して小説執筆ができたのか。シャーロットの指示によって姉妹で小説を書いたのではなかったのか。自ら小説を書きたいという意識は薄かったのではないか。つまりシャーロットやエミリのように留学先でさまざまな外国文学に接し、その文体を学び模倣し、その次の段階で詩や物語を作成することを教授されてきた二人とは作品を作り出すという基本的学習をしていなかった。だからこそ時間が曖昧なのである。そこで作品の中に現れる時間描写を引用してみる。

by the lapse of years (I, 393)
 to spend a few weeks at a watering - place(I, 398)
 I was never nineteen (II, 403)
 At seven I had to put Mary Ann to bed (III, 412)
 About Christmas . . . only of a fortnight's duration . . . those fourteen weeks
 of absence (IV, 418)
 For a few months (VI, 431)
 on the last day of January I (VI, 435)
 The 31st of January (VII, 436)
 half-past eight . . . after eleven (VII, 438)
 four weeks' recreation (IX, 451)
 the second week in March (XII, 471)
 the close of March (XIII, 476)
 Next Sunday was one of the gloomiest of April days (XVI, 497)
 six memorable weeks (XVII, 505)
 The 1st of June arrived (XVIII, 509)
 The middle of July (XX, 519)
 was limited to six weeks (XX, 520)
 I have lived nearly three-and-twenty years (XX, 523)
 Early in June . . . seven months passed away (XXI, 527)

これらは全てを網羅してはいないが、各章の開始場面に表されていることが多い。

上に引用したように、時代を示す描写が無いためアグネスの生きた時代がヴィクトリア朝のどの年代に当てはまるのか明白でない。そのためアグネスという一人の女性の生き方をアンがどう語りたかったのか判断することは、シャーロットを投影させていたジェーン・エアの半生と比較すると強さにかける。ジェーンを通してシャーロットが発言し、ヴィクトリア朝社会を動かす一端を担ったのと比較しても「アグネス・グレイ」が一般読者に対し多くの影響を与えなかったのは、日時の設定がなかったことによるのである。ただヴィクトリア朝の新興ブルジョワ階級と伝統的地主階級の二つの家庭で経験した家庭教師としての弱い立場をリアリティあふれる描写で時代に挑戦したのである。アンは三姉妹の中で最もリアリティに富んでいると20世紀後半、21世紀の現在になってようやく取り上げられるようになった。これは時間的描写の希薄さが、アン の時代に対する挑戦を読者に認知されなかったからである。明白な時間の描写があつてこそ、読者は共感する度合いを強くするのである。

4. さいごに

トレヴェリアンの「イギリス社会史」の第10章以降には、とくにイギリス文学史の中でも多く取り上げられる作品が登場している。文学史上、小説が完成されつつあったデフォアの時代からの作品が取り立たされている。ブロンテに関して彼は「女性が人間としての権利を強く意識されるようになり、ブロンテ姉妹の作品に見事具体化した」と述べている。このように今回取り上げたブロンテ姉妹の作品は歴史学者も認める社会を映し出したものであり、彼女たちの波乱に満ちた短い人生は19世紀ヴィクトリア朝を駆け抜け、それが結実して作品となったのである。特にシャーロットは社会的影響を及ぼした作品を残し、エミリも登場人物の行動の陰に歴史が重なっている。アンは明白さにかけるが写実的描写によって時代を超越したことに気づかされるのである。三姉妹は時代の中に生き、彼女たちの作品も時代を映し出しているといえる。

〈注〉

- 1 ネルソン提督も貧しい牧師の息子だった。
- 2 リバプールは飢饉に喘ぎ、逃れてきたアイルランド移民の最も多く流入した土地で、ブロンテ氏も貧しいアイルランド農民の出身だった。
- 3 シャーロットは教師として1835年7月29日から1838年5月23日までウーラーズ・スクール (Miss Wooler's School) で、1843年1月27日から1844年1月3日までエジェ塾で学生兼英語教師として教壇に立ち、1839年5月から7月19日までシジウィック家 (Sidgwick) で、1841年3月2日から12月までホワイト家 (White) で家庭教師として働いた。

エミリは1838年9月末からロー・ヒル・スクール (Law Hill School) の教師として教壇に立った。ただし期間は6ヶ月から2年ぐらいといわれている。

アンは1839年4月8日から12月までインガム家 (Ingham) で、1841年3月から1845年6月11日までロビンソン家 (Robinson) に家庭教師として働いた。

- 4 巻、章、ページの順に表す。
- 5 仏語、絵画、音楽を教えることが可能だという広告を出している。
- 6 ローウッド・スクールの経営者、ブロックルハースト氏 (the Rev. Brocklehurst) を髣髴させる険しい表情の中年男性である。
- 7 章、ページの順に表す。
- 8 章、ページの順に表す。

引用文献

- Anne Brontë, *The Tenant of Wildfell Hall and Agnes Grey* (Everyman's Library, 1976)
 Emily Brontë, *Wuthering Heights* (Trident Press International, 1999)
 Charlotte Brontë, *Jane Eyre* (Oxford University Press, 1973)

参考文献

- ・今井けい『イギリス女性運動史』日本経済評論社, 1992
- ・樺山紘一・木村靖二・窪添慶文・湯川武『世界全史』講談社, 1994
- ・草光俊雄・近藤和彦・斉藤修・松村高夫『英国を見る―歴史と社会』リポレポート, 1991
- ・櫻庭信之・井上宗和『イギリスの歴史と風景』大修館, 1990
- ・中岡洋編著『『ジェイン・エア』を読む』開文社, 1995
- ・中岡洋・内田能嗣編著『アン・ブロンテ論』開文社, 1999
- ・廣野由美子『『嵐が丘』の謎を解く』創元社, 2001
- ・山口弘恵『アン・ブロンテの世界』開文社, 1992
- ・Chitham, Edward, *A Life of Emily Brontë* (Oxford: Basil Blackwell, 1987)
- ・Hibbert, Christopher, *Queen Victoria: A Personal History* (N.Y.: Basic Books, 2000)
- ・Lloyd, Evans, Barbara and Gareth, *Everymans' Companion to the Brontës* (J.M.Dent & Sons Ltd, 1982)
- ・Trevelyan, G. M., *English Social History: A Survey of Six Centuries Chaucer to Queen Victoria* (Longmans, 1944) (松浦高嶺・今井宏訳『イギリス社会史』みすず書房, 2000年)